

老人性難聴と 補聴器

(1) 老人性難聴とは

加齢に伴い聴力が低下した状態を老人性難聴といいます。年をとれば誰でも耳のきこえが悪くなります。音を感じ取ったり脳に伝える神経細胞は増えたり再生することはないので、その数は加齢と共に老化して減ってゆき聴力低下がおこります。

(2) 加齢に伴う聴力変化は

30歳から

聴力は30歳位から低下が始まり、40歳位ではまだ正常範囲ですが、60歳前半では軽い難聴をおこす人がでてきます。そして、60歳後半になるとほとんどの人が軽度の難聴を示します。そして、70歳で中等度の難聴になる人が多くなります。

(3) 老人性難聴の特徴は

同年齢では男性の方が聴力は悪いようです。これは生物学的な性差ではなく生活様式の違いなどによるものと考えられています。

聴力は時間をかけて徐々に低下し、高い音から聞こえなくなりますが、会話で使う音の高さは中音域です。中音域に変化が及ぶと聴力低下を自覚するようになります。また、言葉のききとりが悪くなることも大きな特徴です。つまり、何かしゃべっていることは判るが、何を言っているのか理解できないということ。特にボソボソとした声や早口でしゃべられると、会話の内容が理解できなくなります。

(4) 補聴器とは

補聴器の構造は簡単に言えば、マイクで音声を拾い、増幅器で大きくしてイヤホンから出力する拡声器と同じ構造です。老人性難聴でも言葉のききとり能力がある程度保たれていれば、補聴器を使うことでかなり会話の理解が上がり、また、静かな環境であれば更に効果が期待できます。補聴器は全ての人に恩恵を与えることはできませんが、道具として上手に使用すれば多くの高齢者にとって有用

と考えます。

(5) 高齢者との会話の注意点は

高齢者に限らず、きこえの低下している人や補聴器をつけている人と話す時は、今持っているコミュニケーションの力を引き出そうとすることが肝心です。眼の力、視覚も使えるように配慮します。話しかける時は正面から話すように心がけ顔の表情が分かるようにします。高齢者は高音域の聴力が低下していますから、少し低めの声で話します。話す声の大きさは普通かやや大きめが良いでしょう。速度はゆっくりと話すように心が

受付は原則として午前9時～正午です。



(医師会)

けましよう。口ははっきりとやや大きく動かしてください。難聴者は多かれ少なかれ口型を見て読唇をしています。ジェスチャーや手振りをまじえて話すと理解しやすと思います。